

通俗伊蘇物語

福岡第一師範學校  
(學校圖書)

|         |   |   |
|---------|---|---|
| 登錄<br>番 | 第 | 號 |
| 文       |   | 門 |
|         |   | 部 |
| 小説      | 款 | 項 |
| 目       |   | 次 |
| 全冊ノ内第   |   | 冊 |
| 分類<br>番 | 第 | 號 |
| 25624   |   |   |
| 933     |   |   |

T 1A1

22

W 46

通伊蘇普物語

明治五十年中官許

渡部氏蔵梓



福岡教育大学蔵書

福師蔵  
渡部知新氏遺書廬示小

時  
〇  
一

冊此書原本曰於外山樵公頃得之  
已成將所梓請題一言余受而  
見之則伊之蘇普譚也通篇二  
百餘語不家言百生使覽之泰  
悟有不可留勸戒之捷徑也

余嘗讀岐陽人某所記伊在保譚  
心竊訝之其云元錄奉旨判  
係某商某日授當時解以既  
在實之字實為

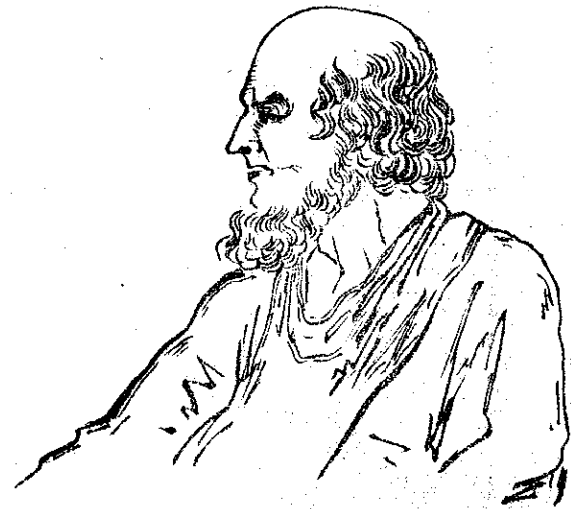
我朝韻譯之權輿惜系梓湮  
滅世罕見之今校以卷之春慕之  
懷壯慰嗚呼世人知莊周

之才而不知伊氏之實寓言禪之世  
教彼法一轍覽者或謂知新氏  
不事玄玄徒作游戲之具則  
又非知新氏者也  
明治六年二月十日在卧西之身  
之身物者衣格有錄謹









ÆSOP

伊蘇普肖像

伊蘇普小傳

希臘亞の古賢伊蘇普を。紀元前五六百年の頃小亞細亞の  
 比利西亞の村に生れたる人あり。此人少時より奇能あり。其の  
 希臘亞の雅典の市人自身を鬻ぎて奴とあり。既而復小亞細亞  
 沙摩斯島の撒入斯氏及び邪的門氏へ轉賣せり。茲に數年乃  
 星霜を送りたり。或功勞を立たるより。遂に其身を贖ふるを  
 得て。始て不羈の身となたり。是より伊蘇普を四方周遊の  
 志を著し。王侯小民を士庶小童も專ら寓言諧談を以せり。  
 故に當時才学の富贍ありきとせふ如し。後世ありて之を



例言

○此度予の譯述せし此伊蘇普氏の寓言譬喩を。徳教を婦幼に説くは徑捷なり。このある村童野婦といふものも、その理を解し易きもの。恰も我邦の俗語に異らば、故に今其譯言をも易解を主旨として、原文の意に随つ。俗言俚語少く書取たり。願くそ看官唯其説話の有益あり。意味の深優ありしに注意して。猶又一層の分解を加。童蒙の説諭せしものあり。予の本懷は過に若夫行文の拙惡と譯字の鄙陋とを論駁せしものあり。大に譯人の意に違つるもの

○譯書を原文の面目を改むるを以て尊とせしものあり。と論を待たず。れに予の此譯述を意味徹底と告じしものあり。前後の文氣と幹旋轉換の勢とに因て、文と辭と代へ辭を文と換へ。大小段落を前後にせしものあり。原文に離合して書取たり。見るものの清く整くものあり。れ

○若し此書の款題を原書に因て譯記せし所を。間問題の如何のありて混乱を生じ易し。故に今重複せる款題を改めし。更に探覽の便を増たり

○余此書を譯述せしもの。先づ俚耳に入る易きものを抄譯して意味の



解難と云ふものを残した。後日閑暇のころあつた。是れも拾遺補譯して以て梓上せん。原書と省く此書と讀む脱落ありと思ふやあれ

○原書不或人他人ありて活説不曉かを失ふを假し名を没為しやてあはく書たるあり

○又井と譯せざる字を大溝と譯し牛と譯せざるを家牛と譯したる類少くは是れを活頭の都合ふるを敢て原字不拘泥せし省官一を執て論ぜりあはく可あり

○或を吸ふと書べしと吸ふと書と老爺と書べしとぢいさんと

書たる類多し。是れを問里の口調不随ひ假名巻の正否にかゝる

○傾し丁度なといふ字の如く。只音を假て書たる類あり是れを別ふ意義あふあはく讀者宜く察せし

○補と書たるを論贊と予の増補せしあり又經に記したるを經濟説畧とある活説を撮合せて譯したるものあり

○(13)の如く西洋数字を毎章不附したるは既予の刷行せし此伊蘇普物語の原書の疑數不引合せんだめの便供へたものあり

○ヤリシヤの如く右の方不雙柱を引たるを地名又ヘルキスの如く右の

方小單柱と引たると人名物名あり。文意ふまて了解あり。

温又識

伊蘇普物語卷之一目錄

|    |              |     |
|----|--------------|-----|
| 第一 | 狐と葡萄の話 (1)   | 第一枚 |
| 第二 | 狐と野羊の話 (4)   | 同   |
| 第三 | 狼と鶴の話 (5)    | 二   |
| 第四 | 呆獐の話 (6)     | 同   |
| 第五 | 蟻と蠅の話 (7)    | 四   |
| 第六 | 泥の仕業とる話 (10) | 五   |
| 第七 | 務と宝珠の話 (11)  | 同   |
| 第八 | 舌と狼の話 (12)   | 同   |

|     |  |    |
|-----|--|----|
| 第九  | 鰐 <small>ワニ</small> と狐 <small>キツネ</small> の話 (13)                      | 六  |
| 第十  | 麻 <small>アサ</small> 見 <small>ミ</small> と麻母 <small>アサハハ</small> の話 (14) | 同  |
| 第十一 | 狐 <small>キツネ</small> と獅子 <small>シシ</small> の話 (15)                     | 七  |
| 第十二 | 老 <small>オシ</small> たる犬 <small>イヌ</small> の話 (16)                      | 同  |
| 第十三 | 馬 <small>ウマ</small> と園夫 <small>エンブ</small> の話 (17)                     | 八  |
| 第十四 | 田舎漢 <small>カヤノヤ</small> と蛇 <small>ヘビ</small> の話 (20)                   | 同  |
| 第十五 | 蛙 <small>カエル</small> と鼠 <small>ネズミ</small> の話 (21)                     | 九  |
| 第十六 | 漁人 <small>イサナリ</small> 笛 <small>フエ</small> を吹く話 (22)                   | 十  |
| 第十七 | 樵夫 <small>セウブ</small> と山靈 <small>サンレイ</small> の話 (23)                  | 十一 |

|     |   |    |
|-----|---|----|
| 第十八 | 犬 <small>イヌ</small> と牛肉 <small>ウシノクニ</small> の話 (24)                      | 同  |
| 第十九 | 狼 <small>オオカミ</small> と羊児 <small>ヒツジゴ</small> の話 (26)                     | 十二 |
| 第二十 | 蛇 <small>ヘビ</small> と蜜壺 <small>ミツヅク</small> の話 (27)                       | 十三 |
| 第二一 | 車 <small>クルマ</small> と車 <small>クルマ</small> の話 (28)                        | 同  |
| 第二二 | 熊 <small>クマ</small> と狐 <small>キツネ</small> の話 (29)                         | 同  |
| 第二三 | 田舎 <small>カヤノヤ</small> 荒 <small>アラ</small> と都荒 <small>トアラ</small> の話 (30) | 十四 |
| 第二四 | 獅子 <small>シシ</small> と鼠 <small>ネズミ</small> の話 (31)                        | 十七 |
| 第二五 | 犬 <small>イヌ</small> と鶴 <small>ツル</small> と狐 <small>キツネ</small> の話 (32)    | 同  |
| 第二六 | 蛙 <small>カエル</small> と牛 <small>ウシ</small> の話 (36)                         | 十八 |

第二七 兎と亀の活 (38)

十九

第二八 蟹兎と蟹母の活 (41)

同

第二九 寺(逃込)んと黒の活 (42)

二十

第三十 牧童と狼の活 (43)

同

第三一 貉と猫の活 (44)

二二

第三二 狐と山番の活 (46)

同

第三三 蟻と水蛇の活 (47)

二三

第三四 片眼の麻の活 (48)

同

第三五 胃腑と支那の活 (49)

二四

第三六 旅人と熊の活 (50)

二五

第三七 獅子と驢馬と狐の活 (51)

二六

第三八 牛部屋(逃込)んと麻の活 (52)

二七

第三九 兎と狸犬の活 (53)

二八

第四十 海豚と鯢魚の活 (54)

同

第四一 焼炭人と暴市人の活 (55)

二九

第四二 獅子の忠慕の活 (56)

同

第四三 風と日輪の活 (57)

三〇

第四四 百姓と兎の活 (58)

同

第四、五 樹と芥の話(四)

三二

伊蘇普物語卷之一 目錄終

伊蘇普物語卷之一

無盡藏書齋主人譯述

第一 狐と葡萄の話(一)

或日狐葡萄園に入りて赤く熟せし葡萄の高を架より披窓ふ  
 さざりたるを見ても甘きうらやと散舌をてて歩揚て幾度と  
 あく躍より躍りたるもいづれもいづれも狐の怒を費てヨシあんど  
 あんかものも葡萄とをまじむるぞ

あんでもいふ前儀のものをいふや。自らの思ふにあらねど  
 あつたはれと誂る。いづれかの松もあつたやゆゑに戒めねど

あつぬぞ(補)

第二 狐と野羊の話(4)

或狐溜井小落て。よりんと。ふぼづとあられを。如何せんと思案さる。内小野羊水を飲却と。さす。狐の首を。たると見て。狐の水を好まう。す。だんと。たると。と。狐滅る。りを推隠。イヤモウ。好水で。す。は。下。た。たい。り。あ。て。私。を。飲盡。す。ぬ。と。野羊。何の。き。も。あ。く。真。小。確。あ。む。り。と。狐。の。は。角。つ。も。と。け。首。を。踏。て。跳。上。る。の。野羊。を。う。り。み。て

冷笑ひ。狐。に。汝。の。世。分。や。も。智恵。を。と。り。て。か。こ。あ。る。跳。下。る。前。小。く。見。え。ら。う。ふ

第三 狼と鶴の話(5)

或狼。咽。小。大。い。骨。を。た。て。彼。地。此。地。狂。い。歩。き。吾。の。苦。痛。を。救。ふ。と。の。あ。つ。む。好。報。を。と。さ。ん。と。鶴。の。鶴。と。の。と。見。て。毒。の。お。と。い。ひ。を。つ。や。を。好。物。を。鶴。に。い。ふ。も。ふ。心。動。き。吾。救。い。ま。う。と。ん。と。長。く。と。ち。を。と。狼。の。口。小。く。い。れ。ぬ。と。い。ふ。も。腹。美。を。鶴。に。い。ふ。と。丁。寧。小。く。い。ふ。未。だ。れ。も。狼。目。を。腹。を。牙。を。む。き。や。す。の。思。え。ば。ぬ。を。と。狼。の。腮。首。を。と。と。や。後。の。ま。せ



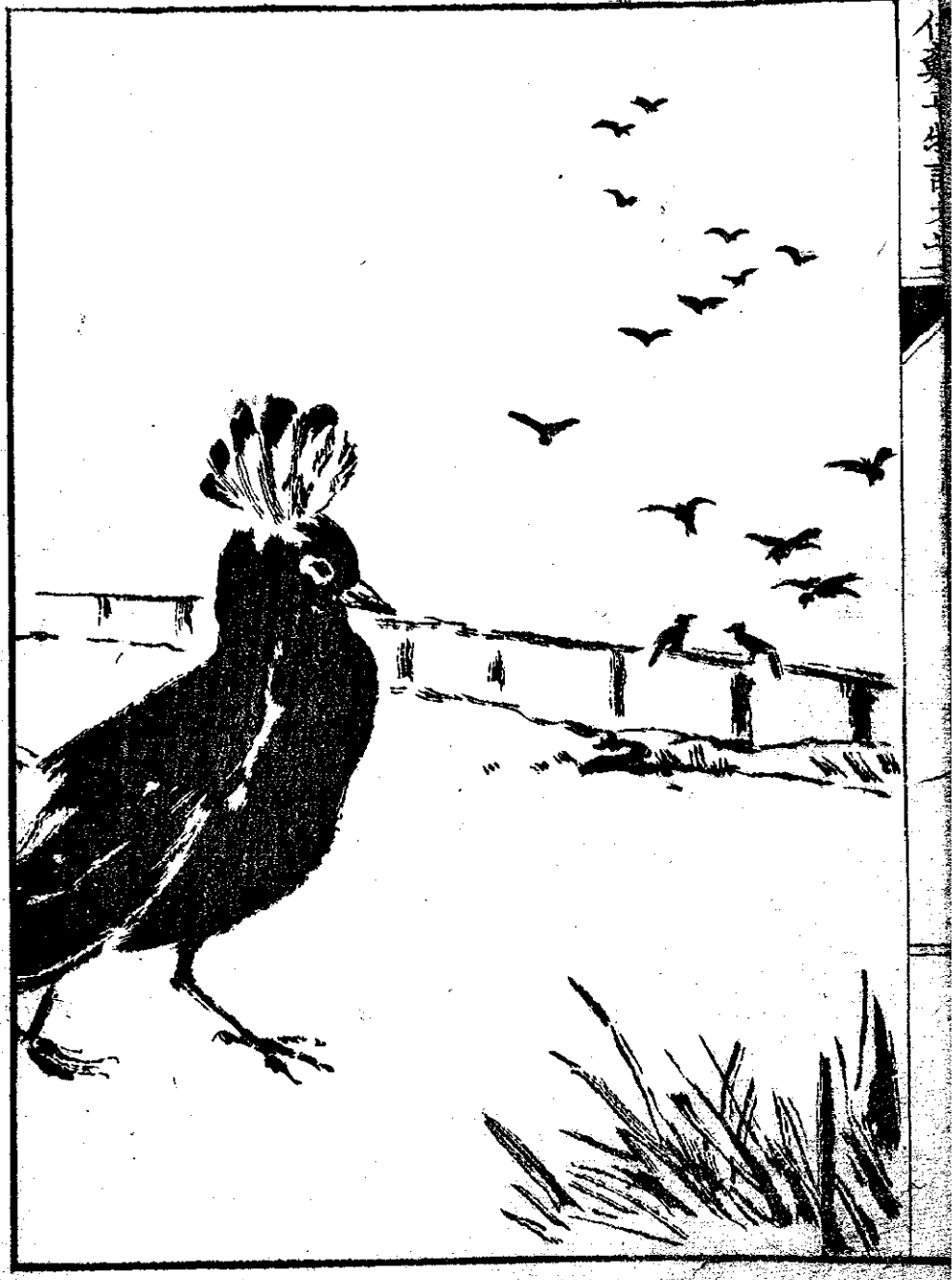
喰切<sup>くひきり</sup>ぬのそ最<sup>めつ</sup>僥倖<sup>りょうじやう</sup>だ。あんで褒美<sup>わうび</sup>のつゝもの。おの太<sup>おの</sup>つ

夢を覺たいの。さうしてこれをひたいの思て人をさふ  
 ものさ。たゞ一人でもさういふ。礼さうでさうさう。  
 却て面白さういふ。は方さうい。何でも人を助けたり  
 人ふ施さういふ。報を目的ふさうい。簡さうい。や

第四  
あやうき  
呆騷の活  
(6)

或呆<sup>わろ</sup>驕<sup>う</sup>いのあもして身を飾<sup>かざ</sup>す。仲間<sup>なかま</sup>物<sup>もの</sup>ふ誇<sup>こ</sup>らんとのををし。切<sup>き</sup>ふ  
孔雀<sup>くわんぐ</sup>の脱<sup>ぬ</sup>羽<sup>は</sup>を拾<sup>ひろ</sup>ひ己<sup>おの</sup>の尾<sup>お</sup>羽<sup>は</sup>根<sup>ね</sup>の間<sup>あひだ</sup>ふさうあも。今<sup>いま</sup>との朋<sup>とも</sup>輩<sup>だい</sup>と

軽侮で。美しき孔雀の群へ飛び、孔雀を真ふあのまゝでも  
 ものと見せぬ。あつた奴らあつて生羽と剪らう。汝は汝の身を  
 おせんとして、鬚をそろけて衝逐したり。そなた呆物を外へ  
 行ぐとも方もあらねども。故のやうにさうなり。あつた仲間へ入ると  
 まゝと友だちにも知らせない。さうな彼奴の傍にいたる顔色がい  
 ふく〜とき。あつて仲間へいざいさせん。ともなふ古老の牒の  
 親切小説論してコレ。汝造物者祇典之分際を守つて居て  
 あつ。あんが長上のものお訓もめせぬ。同輩のものお害あ  
 られませぬといふ



第五 蟻と蟲冬蟲の話(7)

夏もまじく秋もたけ。稍冬枯の頃ふあつてあゝ暖あ。日。蟻も  
 多く打あつたり。夏の日ふりり收る餌を日ふ晒とて穴より出  
 居たり。のゝともふいと飢つれたるまじり。几満珊まで命を  
 つあぐなめ。いさゝか生餌をもちもれをて。そ附古老の蟻より  
 見て。め何振返をまじり。はま。汝も夏中何とて暮されや。何れ  
 食ふ困らるや」と問む。まじり。は橋をふまて。は夏といと面白こそ  
 あり。れ。花ふ我も景ふ賊。まやを露。身もを羅衣。ほひも。一舞  
 も。つと。ひも。ぬ。蟻打笑ひ。まじり。も。合力を。は。用あり。

我もを夏の冬天小脊をまじり。て餌と運び。は冬枯の用意をま  
 じり。故ふ今日の安心あり。水の夏中踏歌いて徒小日と消ア。もの。は。  
 冬ふあつて。と飢。ともふあり。我を知て。と。まじり。と。て。経

夏小稼。餘徳も。冬ふあつて。頭。もの。やぞ

第六 龍の仕業まじり話(10)

む。一或山烈々震動して。内より何の出現。まじり。一。評判。  
 高。まじり。遠近より見物人多く集り来て。是と定て。まじり。  
 もの。まじり。あ。まじり。何あ。んと人々待ね。まじり。一。須臾あつて  
 大。地。響。まじり。まじり。正。小。龍。の。孤。然。踊。出。まじり。て。テウ

いさあ〜と廣大の趣工をいひう〜あぶら。細小ぬ体ゆと  
 せういものと誂アぬるのいや

第七 新と宝珠の話 (11)

或日雄辯の雄辯のため小餌と啄ふと。不圖苦果の中つゝ宝珠と  
見出。おんごう。ヤ。是を結構お玉じや。好む人をさぞねーのう  
だらう。志の私を世中の真珠より一粒でも要の方より好  
い物をよく解理せーよ。おや。世の中を善悪の見かた  
つゞふ。何ごう宝の如くして徒らふ者過を思ふごまひ

第八  
羔<sup>とひ</sup>と狼の活  
(12)

蒸屋やわのより下を通る狼を見下し。頻りに口をくちくちと。狼立止む。  
睨あげて。「い卑怯なものめ。乃公を馬鹿ふきくらゐか。何も汝が強い  
のいやア後ぞ。居なすういあうめりだ」

高たか位ゐ下したのの人ひとををああままががどどももをを恰あたもも亦またのの根ねをを罵ののふふ異ことららにに通と

第九  
就と狐の活  
(13)

或大木の梢小蛇蛇を巣をうけ。狐その下小穴をつくら。豆小厚情ふ交通なり。一日狐母他行せ。間小蛇の意心をせうて我栖所を高くあけ。被より報復をあ。得。狐兒を援さ。我兒の餌食ふ持去。やうて狐母歸り。隣交ふ有。このつと









皇朝筆意









何ひめ何ふての多ふ入まんものをし。まづ己の辞をいふて。  
 羊の方つつけ来る。狼ウルフに「恩羊、汝を我が飲で居る水を濁しやア  
 かつたか」といふ。羊丁寧小言て「私を下流で飲で居る。たの  
 だうら。假令濁しても上流の水を絶と害をいせうませぬ。  
 狼、まゝさうだとも。汝を一年お小言と悪くさうか。羊あるがう。」「  
 汝一年お小言を私をまづはせしませぬ。狼、假令汝であいてい。  
 汝の罪のゆるがさうさ。やむら。汝がなにも因縁とそれの乃公の  
 餌食とをのぐれる。謝辞をあるものとして。直に弱羊を蹴めよ。  
 すゝふ。裂を食ひるものとぞ。

暴人ざうじん 小向せうかう 分解ぶんかい と通とほ 教きやう だ。たゞく 毒害どくがい 正理せいり の人ひと あらうとも。  
 悪人あくじん の威勢いきせい ひ熾さか むある。附つ け。これに勝か ちのあつて、  
 知し

第二十  
蠅と蜜壺の話  
(27)

或は糖類を南ふ店あり。蜂蜜の壺倒れ。蜜あられでりれた。  
 数多の蜂群を南ふて。一隅も残らずと蜜を貪り居た。我々も  
 少時たつとつても足らず素早くうろて飛むしはるふ飛べた。  
 そあで蜂の皆歎息して。ア。我輩を實小思はつて。只一寸の  
 飲樂のためふ大切の命を失うまじと。只ふ悔會ひくるこそ









内いふ運ふ逢ふも。げ上もあそし幸福あり。そこの吾田舎住居ハ。  
 いと思ひありき。思ひつ。實も主も打とけて。やうり。おあむ。最中。  
 邪屋の戸から。ぞと押寄。と。組の碎客。突入。も。花もハ。仲矢。  
 登より下。横び。落。ち。狼狽。も。り。大方。あ。に。命。う。り。あ。げ。米。ハ。  
 沸く。隅。ふ。か。れ。々。も。あ。稍。志。も。う。く。く。て。人。も。去。り。風。波。再。び。あ。つ。  
 ま。り。り。も。い。も。田舎。荒。を。そ。ろ。く。這。出。し。花。荒。ふ。れ。と。あ。げ。田舎。荒。ふ。ん。か。  
 ま。ま。と。好。人。を。好。だ。ら。う。の。吾。と。あ。あ。り。や。兼。也。あ。り。の。あ。あ。ん。で。  
 甘。い。も。を。食。ふ。り。寧。ろ。分。と。安。ふ。の。あ。で。麦。飯。と。食。ふ。方。の。余。程。  
 好。あ。う。ま。い。と。あ。い。ふ。あ。な。に。己。の。住。家。歸。り。々。も。い。と。い。

第二十四 獅子と鼠の格 (31)

或日獅子王。洞。小。在。て。依。寐。り。し。所。鼠。あ。ち。あ。ち。這。あ。も。く。拍。ふ。思。ひ。  
 獅子王の鼻。の。け。上。り。年。睡。の。夢。を。あ。い。ら。う。り。れ。ど。獅子王。直。ふ。ま。と。  
 ぞ。の。も。め。め。一。落。し。鼠。を。押。し。只。一。落。し。ふ。ま。と。ん。と。せ。鼠。哀。げ。  
 あ。あ。あ。あ。あ。あ。げ。石。思。い。た。の。で。は。あ。う。ま。い。と。い。と。ぞ。助。け。て。い。  
 せ。り。ま。せ。鼠。の。指。を。小。鼠。の。奴。ふ。貴。い。は。ま。と。を。逃。け。し。あ。う。れ。い。と。い。  
 勿。体。あ。う。ま。い。と。い。と。あ。い。と。獅子王。鼠。の。思。ひ。た。指。を。身。を。笑。ひ。  
 あ。い。と。い。と。い。と。後。に。あ。い。と。獅子王。鼠。を。殺。て。い。と。い。と。い。と。い。  
 獵。夫。の。役。だ。し。宜。ふ。か。う。と。逃。り。い。と。い。と。い。と。い。と。逃。り。い。と。い。と。い。と。い。













Handwritten signature: *John D. Smith*

第三十二 狐と山番の話 (46)

孤狩人（うぐいと）ふ追（おひ）うけられ。山番小屋の近所（きんじ）へ逃（のが）て来て。番人の木を揺（ゆ）て  
 居（ゐ）るのを見て。旦那（だんな）ちやうと隠（かく）まきせて下（くだ）されと云（い）ふ。番人の  
 彼所（あそこ）と云（い）ふあつら番小屋を見う。ゆゑ。孤（ひとり）はまゐるを領（さし）うし。喜（よろこ）び  
 肉（にく）へ逃（のが）込み。方隅（かすみ）ふ隠（かく）まきして居（ゐ）る。やがて馬（うま）ふ乗（の）り相公（さうこう）二人  
 追（おひ）来る。ヤイ。山番。孤（ひとり）の本（もと）ア。ね。の。と云（い）ふ。番人の否（い）と云（い）ふ。のら。  
 隅（すみ）の方（かた）ちやうと指（ゆび）を指（さ）す。されど相公（さうこう）と一向悟（いつやうご）らん。ま。やア  
 と。と先（さき）と。ま。と。鞭（むち）を揚（あ）げ。追（おひ）まき。そので狩人（うぐいと）の影（かげ）を見（み）て。あ。く

あゝと。狐がやうもうやと跳<sup>は</sup>走<sup>に</sup>して往<sup>や</sup>を。番人見付て、やい畜<sup>ちく</sup>生<sup>せい</sup>め。  
助けて、もう一つ、れも云<sup>い</sup>ふふゆ、奴<sup>やつ</sup>があゝ。どの奴<sup>やつ</sup>とて、狐<sup>きつ</sup>ふを  
かき。鞭<sup>むち</sup>をい。旦那さん、や。ど。汝<sup>なんぢ</sup>の括<sup>くわ</sup>ぐ口<sup>くち</sup>のやうな親<sup>おや</sup>切<sup>き</sup>あら。  
どろろ、て、お挨拶<sup>あいさつ</sup>をせ、お去<sup>さ</sup>まをせう

[illegible]

第三卷 移し水瓶の話 (47)

或猶渴ふ<sup>あぢ</sup>堪<sup>た</sup>へな<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>射<sup>や</sup>す<sup>す</sup>の<sup>の</sup>向<sup>むか</sup>ふ<sup>ふ</sup>水<sup>みづ</sup>瓶<sup>びん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>を見<sup>み</sup>付<sup>づ</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>ん<sup>ん</sup>で  
そ<sup>そ</sup>こ<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>一<sup>い</sup>羽<sup>は</sup>お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>見<sup>み</sup>え<sup>え</sup>し<sup>し</sup>。水<sup>みづ</sup>低<sup>ひ</sup>う<sup>う</sup>ーと<sup>と</sup>啄<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>。ん<sup>ん</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>と<sup>と</sup>  
瓶<sup>びん</sup>を<sup>を</sup>破<sup>や</sup>ん<sup>ん</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>覆<sup>フ</sup>さん<sup>さん</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>力<sup>ちから</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ー<sup>ー</sup>必<sup>かならず</sup>何<sup>なん</sup>ふ<sup>ふ</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>当<sup>あた</sup>惑<sup>く</sup>ーと<sup>と</sup>

居たり。不圖思つて。傳ふある。砂を啄つ。づ。蛇の肉。つ。後。水量。の。増。て。来。て。終。小。鰐。を。あ。つ。た。を。と。飲。で。死。を。免。ま。し。て。さ。う。と。

既。や。力。が。及。ぶ。ぬ。と。い。ふ。處。で。巧。智。と。忍。耐。と。の。功。を。奏。せ。て。さ。う。て。窘。迫。と。い。ふ。づ。い。つ。も。苦。難。の。根。で。は。な。る。

第三十四 片眼の麻の話 (48)

一日片眼の麻海辺。ふ。出。て。草。を。も。む。ふ。美。だ。る。眼。を。海。の。方。に。明。く。眼。を。陸。の。方。に。是。で。を。係。令。持。人。の。来。て。も。真。一。目。瞭。然。だ。と。感。心。と。迷。を。居。る。と。武。士。西。三。人。舟。遊。ふ。出。の。け。あ。ち。ち。ち。漕。ま。ら。う。て。

海。邊。の。麻。の。居。る。の。と。見。つ。け。と。今。ふ。ら。小。矢。を。注。ぐ。忽。ち。そ。を。射。て。り。と。そ。所。麻。屑。を。つ。り。て。さ。う。と。鳴。呼。吾。等。と。運。の。微。い。の。と。い。い。と。あ。ん。ど。も。危。殆。だ。と。思。つ。た。方。に。安。泰。で。大。丈。丈。と。見。え。た。方。に。款。の。来。て。あ。ん。ど。も。災。害。を。思。ひ。も。う。ぬ。方。う。う。来。と。い。う。や。

第三十五 胃腑と支那の話 (49)

或。時。人。の。四。肢。五。官。胃。腑。の。向。つ。て。一。揆。を。起。し。各。々。合。さ。る。と。我。々。を。や。く。登。衣。と。い。ふ。働。き。頻。々。小。食。料。を。仕。送。る。小。彼。を。ゆ。て。食。料。を。あ。て。絶。し。我。々。報。い。ん。も。せ。ば。不。任。我。輩。を。白。す。の。傷。を。止。め。此。意。情。と。い。は。送。り。と。さ。う。い。ふ。め。ま。と。是。を。食。堂。に。ゆ。て。と。止。め。







捕人ふ追まて逃迷たる麻或百姓衣を見つけたと逃むて恰好あけて  
ある牛舂登へ跳ひた。所隅小横である草束の中へ隠れし。繫きて居る  
牛舂をうけ。汝を何でうんか人目の多い支へ逃さんだの。アツから黙て  
居て居ませ。好機会を見し。直ふ他支へ行うつと。彼をさる内務寮が  
あつて牛舂のタ林をやつた事。作男の何の急しきつふ處へ出入をせよ。  
番頭人の見ゆ。うまてあちまつと掲来てゆく。あつて隠して居る麻  
中を直も草の角に小仕舞や。麻々々縁相續て安心の時はあつた。  
草の中うら夢をあけ。牛へ庇蔽してこれの動然と起つて。牛う喰へ  
たて。ア。どうも待つて。我輩も。どうも汝の要難ふ逃了せ。根やと

わて居るの。まじけ家ふ百人の眼珠を持て。人あつた。若くまが  
本チア汝の命をたて。たて活して居る。今。南家の主人。晚餐を喰畢。  
束の根を。一巡り見て。来や。あ人。これ。汝を牛の根が。ぬい根が。先ッ  
牛舂を。さつと這入槽を見て。大お怒をあげ。あせ。んか。ふ。林を。さつ  
と。ア。あせ。草を。やん。と。な。子。エ。胆。の。つ。つ。ラ。ア。青。く。蛛。網。の。や。と。掃。い  
ね。ア。い。少。許。の。み。ふ。わ。さ。で。か。の。い。と。小。言。で。な。あ。の。う。ら。東。西。見。い。て。  
草束の中うら。角尖の。うら。つと。出。て。居。る。の。を。見。つ。け。主。人。や。麻。が。居。る。麻。が  
居。る。と。叫。び。し。若。き。の。が。大。聲。に。い。け。て。来。て。あ。ち。ま。捕。り。や。つ。た。と。い。う。  
あ。ん。で。も。主。人。や。目。の。届。く。と。の。と。あ。つ





僧之奇  
印



むの或山お位<sup>すし</sup>る。獅子<sup>しし</sup>。樵夫<sup>しやうふ</sup>の娘<sup>むすめ</sup>お愛恋<sup>あいれん</sup>して。爺<sup>おや</sup>お迫<sup>おせ</sup>り娘<sup>むすめ</sup>を娶<sup>めと</sup>らんこ  
 こ<sup>こ</sup>を<sup>おや</sup>爺<sup>おや</sup>と嫌<sup>きら</sup>ひも<sup>も</sup>と大王<sup>おおき</sup>の機嫌<sup>きげん</sup>を損<sup>そん</sup>ぜ<sup>ず</sup>も。め何<sup>い</sup>ある災害<sup>わざはひ</sup>おつ  
 らんも<sup>も</sup>その<sup>やう</sup>やうと<sup>と</sup>と<sup>と</sup>あひつ<sup>やう</sup>怪縁<sup>かいえん</sup>せ<sup>い</sup>の。さつと一<sup>い</sup>計<sup>けい</sup>を<sup>かん</sup>考<sup>かん</sup>ふ  
 真<sup>まこと</sup>ふ獅子<sup>しし</sup>の汗<sup>あせ</sup>を<sup>も</sup>ば<sup>ば</sup>度<sup>ど</sup>り<sup>り</sup>込<sup>こ</sup>の<sup>まこと</sup>遠<sup>とほ</sup>を<sup>めづ</sup>誠<sup>まこと</sup>お<sup>めづ</sup>以<sup>もつ</sup>て<sup>めづ</sup>冥<sup>めい</sup>加<sup>か</sup>極<sup>ごく</sup>難<sup>なん</sup>と<sup>お</sup>お  
 ち<sup>ち</sup>も<sup>も</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>しん</sup>大王<sup>おおき</sup>の<sup>しん</sup>歯<sup>は</sup>齒<sup>は</sup>や<sup>しん</sup>爪<sup>つめ</sup>の<sup>しん</sup>根<sup>ね</sup>で<sup>しん</sup>も<sup>も</sup>何<sup>い</sup>や<sup>や</sup>の<sup>い</sup>女<sup>に</sup>も<sup>め</sup>お<sup>め</sup>それ  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶<sup>おぼ</sup>え<sup>おぼ</sup>る<sup>おぼ</sup>我<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>の<sup>い</sup>度<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
 ち<sup>ち</sup>と<sup>ち</sup>男<sup>おとこ</sup>振<sup>おとこ</sup>と<sup>おとこ</sup>つ<sup>おとこ</sup>く<sup>おとこ</sup>せ<sup>おとこ</sup>ぬ<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>娘<sup>むすめ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>憶

既も身み小備こゑの事こともあつた。少ちも可か懼こううをふいと。父おやぢ急いそに強つよくあり。天秤てんびん棒ぼうを執とつとつて押おしつけ婚むこをたゞき出だせしとぞ

既<sup>ま</sup>小<sup>こ</sup>爪<sup>づめ</sup>を失<sup>う</sup>つた<sup>あ</sup>後<sup>ご</sup>を又<sup>また</sup>必<sup>い</sup>何<sup>なん</sup>を<sup>を</sup>補<sup>おぎな</sup>ふ

第四十三 風と日輪あちえんの話 (57)

或時日輪と風との間ふいつきの力に流るゝんとせんとて争論  
果しあひまじらむとあうまんとて茲にめぐりくる旅人雨衣をぬぎ  
だらんと力務むると定めんと風まづ術を施して寒くまげしと  
嵐を起せむ。旅人そやう雨衣をぬぎ吹取むと身ふ纏つと。時  
日輪雲間より出て赫たる和光を放ち霧を拂ひ寒を除けと旅人を

暖菜を愉快。日のまんく照るふ陰い遠く熱いふ境のひで。寛衣  
雨衣を脱ぎたる。とぞあで日輪の方勝たり

暴を以てふを遂げ威を以て人を伏せん。相柔ふ切倫  
しく人の心緒を解くふさうだ

第四十四 百姓と見輩の活(58)

某村の百姓何某死ふ陰あるとき見輩を棄め死後その遺言  
して。吾の命をとりあれ限り。や。とて吾の汝に譲りしといふ  
もの。と外中をあい。只葡萄畑の肉よあんでもお務りて稼ぐとい  
と。言終り息絶たり。とあて見輩を先ッ埋葬のつを無さる

亡父の遺言を判断してあんでも亡父を彼畑の肉よ黄金を埋て金  
たふ相違。とあて。各自ふ来粘持。毎り葡萄の畑を隅  
う隅まで堀み。て草をあらうて見と。あま。と。お。つ。もの  
あ。と。草を取り土をゆるめたるゆゑ。葡萄の  
蔓葉茂り。と。秋ゆりて。例年より。結果あり。利市  
数倍あり。亡父の遺言をそありたり。兄弟初て。や。を  
悟。い。お。務。り。と。あ。て

家業勉強を富を得。基し知。り

第四十五 樹と芥の活(59)

想其林の中あ木あり衆樹小向ハ腰を屈て斧の柄ふあゝと細き  
木を要めしれと乞ふ。そ彼方より慇懃あをせられも。大木ども  
領りて極下賤ある。秦皮を渡りも。想其をを得ては  
斧の柄を作してあ大木へ伐りて。榲樹大は後悔し。ありの  
杉樹ハ耳語し。ねア。悪いひを。た可憐小彼の後頭ハ秦皮を  
彼奴のふ渡さあつたあ。我輩をまこと生延す。たふ  
他の不為を吾不為とひひを知れ補

伊蘇普物語卷之一終